

## 第3章 読谷村復興の歩み

## 1 . はじめに

米軍の上陸後まもなく、米軍の捕虜になった人々は各地に設置された「収容所」に送り込まれた。荒れ狂う“鉄の暴風”に打ちひしがれた沖縄の人々にとっては、収容所生活も安堵としたものではなかった。雨露をしのぐだけのテントの中に押し込められ、わずかな食糧で毎日を暮らさなければならず栄養失調や病気などで亡くなる人も多かった。

収容所に収容された人は、1945年10月頃からそれぞれのふるさとへ帰ることが許された。敗戦のショックから覚めやらぬまま、家を建て、焼け野原となった、田畑を耕す者、漁にでる者と心を癒す間もなく、荒廃したふるさとの復興に取り組んだ。

この頃では、読谷村の復興の中心となった読谷村建設隊の様子や戦後の各集落での移動背景等を紹介します。

## 2 . 国頭避難・捕虜

1944年10月10日の大空襲を皮切りに、次々と米軍の空襲が県民を容赦なく襲った。これによって家財を失い、あるいは直に身の危険を感じた人々が大挙国頭に避難を開始した。

県は国頭疎開に際して収容小屋を造ることを計画していたが、これを受けて国頭村では2月17日に村長から各字に再度の「疎開者割当変更通知」があり、最終総計で18,000人の避難民が国頭全域に配置され、3月21日までに5,072人が入村した。読谷山村民約6,390人の指定地域は国頭村浜から伊地までの8部落の民家や山手の避難小屋であった。

3月22日、島田知事は「人口課に老幼女子を国頭に速急に避難させよ」との指示を出した。これを受けて、避難民が割当地域に関係なく殺到し、国頭の山中は避難民であふれ、国頭村民1万人の1年分の食糧がたったの2

か月で食いつぶされたのであった。その後は、口にはいるものは何でも食べたが、心身ともに衰弱し、マラリアや風土病による病死者あるいは餓死者が子供や老人を中心に続出し、敵の銃弾に落ちる者もあとをたたなかった。やがて、避難民は国頭の山奥ではどうしようもないということで、食糧を求めて各々帰村すべく南下するようになり、その途中で村民は全員が捕虜となったのであった。

一方、4月1日の米軍上陸と同時に捕虜になった者は、生まれ育った地を死に場所を選び、屋敷内の縦穴避難壕や、先祖代々の亀甲墓あるいは近くの自然壕に隠れていた老人達であった。続いて捕虜になったのは、近隣の多幸山、牧原、長田等の山中に遅れて逃れた人々であった。こうして4月5日頃までには、楚辺にあった最初の収容所に数百人の住民が収容された。米軍の沖縄侵攻作戦は捕虜収容計画もふくめて計画通り推進されたのであった。

ここで、アメリカ兵士の最初に見た沖縄県民（読谷村民）とその印象を、『アメリカの一水兵の沖縄戦日記』から紹介する。

1945年4月5日

午前10時30分、私は最初の捕虜を見た。兵士達が読谷飛行場から連れて来たのだ。かわいそうに、小さな子供と女と老人ばかりだ。もしそれが少しの慰めにでもなるのなら、私も彼らとともに座って泣きたいくらいだ。この人達は、何年も何年もここに住んでいるのだ。ここは彼らの生まれた土地で、彼らはずっと幸せだったと思う。

しかしどうだろう。いわゆる文明というものを持って我々がやってきて、人を殺し、強姦をし、そしてこの人々の生活と家を破壊した。この人達には何の罪もないのだ。彼らはこの島々の原住民で、何千年もここに住んで

いるのだ。彼らは日本人ではない。また、誤解のないように言えば、私の知るかぎりでは、日本人といえども大変素晴らしい人々のように見える。我が国の政治家達が我々に宣伝し

てきたことはまったくバカげたものだ。ここで私は、この殺戮に自分が関わったことに対し、神の許しを乞いたい。

## 読谷村民の避難経路と捕虜収容所





戦禍を追われ、持てるだけの荷物を持ち、米軍指定の施設に向かう人々。(6月20日)



前線から後方へ避難する老人や子ども。読谷村民ではなかろうか。(4月2日)



4月初日から収容所生活に入った人々もいたが、一方では山原の山奥で飢えと戦いながら、何か月も避難生活を過ごす人々の方が多かった。国頭村安田の山裾を歩く難民（8月1日）



軍政部がとりあつかう避難民の収容者数は、米軍上陸以来急速に増え、4月末には126,876人で、6月初めの頃には144,331人に膨れ上がり、戦闘が済んだ頃の総収容者数は約196,000人を数えた。

### 3 . 読谷村建設隊

1945年8月、日本の降伏によって、中北部の収容所にいた人達は、それぞれ自分の村に復帰を始めた。しかし読谷山には、飛行場をはじめ、米軍の施設が多かったため、村民の復帰は許されなかった。

1946年4月、戦後初代の村長に任命された知花英康氏は、胡座に読谷山村役所を設置、東恩納にあった民政府に読谷村民の村への復帰を要請した。同時に、各地の収容所に散在している村民と連絡を取り、移動の準備を整えた。戦災でほとんど破壊されたとはいえ、当時村内には残存家屋もかなりあったし、畑には芋も沢山あったが、近くの収容所にいた人達がトラックでこれらの家屋を崩して持ち去ったり、農作物も荒らされた。そこで、当時の仮役所はそれらの資材・家屋・食糧などを保護することに力を注ぎ、胡座や石川から交替で監視を出すことになった。

村民の切なる訴えと、民政府当局の尽力で1946年8月、ようやく波平と高志保の一部が解放されるようになった。知花村長は、ただちに600人の「読谷村建設隊」を編成し、これを引き連れて郷土に乗り込んだ。

当時の読谷山は、見渡す限り米軍施設で、戦前の面影は全く消え失せていた。木は切り倒され、石垣や垣根は破壊され、すすきや雑草が伸び放題にはびこり、部落の中に山鳥が巢食い、マングースが徘徊し、山羊や牛馬の骸骨などもあって全く廃墟と化していた。勢い込んでやってきた建設隊も茫然自失、全く何から手をつけていいか分からない状態だった。

それでも建設隊は、「協力して村再建に挺身し、理想郷を建設する」ことを誓い合い、知花英康村長のもとに、総務・建築・農耕・衛生・食糧の5つの部を設け、まず戦災を免れた家屋を修理して宿舎にあて、建設にとりかかった。

(読谷山村建設隊綱領)

1 . われらは、協力一致をもって郷土読谷山の建設に挺身する。

1 . われらは、公正明朗誠実を旨とし、もって村民の信倚に応えんとす。

1 . われらは、篤実剛健責任を重んじ、謙讓親和をもって理想郷の建設を期す。

( 宣 誓 )

戦いに追われ、村を出てからすでに1年有半、今月許されて村に入り、村再建の仕事に取りかかることを考えると誠に感慨深いものがあります。われら建設隊員一同は、村長殿のご意志をくみ、各部長の注意を守り、誠心誠意、村再建の仕事にあたり、ひとつには戦争の犠牲になって死んだ人々に対する務めを果たし、ひとつにはいまなお各地に散在して、村に帰る日を毎日待ちわびている村民の期待にそいたいと決心しています。

以上決意を述べて宣誓といたします。

1946年8月12日

村建設隊長

山 内 昌 正

建設隊員は、まず散乱している廃物を片づけ、屋敷を整理し、規格住宅の建築にとりかかった。衛生部員は埋められた井戸を浚渫し、便所をつくり、農耕部員は野生の甘藷や野菜を採集して建設隊の食糧に供しながら農耕計画にあたった。又村内をくまなく監視して資材を保護、建設の進行に努め、建設隊による村再建の作業は秩序正しく進んでいった。

ところが8月31日、米軍は突然建設中止の命令を出し、民政府は「明日中に読谷山から立ち退くよう」命じた。知花村長は9月1日、

東恩納の民政府に志喜屋孝信知事、又吉康和総務部長らを訪ね、読谷山村の実情を報告すると共に、『村建設が中止されては、村長としての職にあることは無意味である』として辞表を出したが慰留された。

折角村民の故郷への復帰の夢をかなえようとして、村再建に努めてきた建設隊は、涙をのんで引き上げたが、9月11日になって中止

命令は解かれ、同時に住居許可地域も広げられた。知花村長以下建設隊は元気百倍、再び9月16日には村再建の仕事にかかった。隊員も、これまで600人から700人に増員、新しい陣容を整えた。

(『読谷村誌』より)



日本軍屋嘉捕虜収容所跡の碑



4月3日、早くに捕虜になった人達は収容施設がないため、焼け残った数少ない民家において共同生活が始まった。渡具知の民家か、場所不明。

## 4 . 戦後に見る読谷村民・ 集落の移動経過

### 1) 村民の帰村状況

本村は、沖縄戦の上陸地点であることから多くの戦災や直接的な被害を受けた。昭和20年8月15日日本は降伏した。しかし中北部の収容所に難を逃れていた村民は自分の村に帰村することは許されなかった。昭和21年8月ようやく波平と高志保の一部が開放されることになり「読谷山村建設隊」と「建設後援

会」とが一体となって、村再建の作業が進められるようになった。

以下は、各字の帰村の状況を述べたものである。



共同で標準住宅を建設する人々。(昭和20年8月頃)

### 1946 (昭和21) 年

- 8月6日 波平・高志保区居住許可
- 8月12日 読谷山村建設隊を組織し読谷村建設に着手
- 8月31日 住民移動中止命令により建設隊読谷村を引き揚げる
- 8月11日 移動中止命令解かれる
- 9月16日 建設隊再び建設に着手
- 11月15日 楚辺・大木区居住許可
- 11月20日 村民が第一次移動開始(12月12日完了 辺土名・田井等・久志方面から約5千人が帰村。高志保以北の字民は高志保へ波平以南の住民は波平へ)
- 12月1日 読谷村役所開設

### 1947 (昭和22) 年

- 1月28日 建設隊南部支部を楚辺に置き建設に着手
- 4月21日 第二次移動開始(3月6日完了。主に宜野座方面から)
- 4月1日 波平に居住していた古堅校区の人達が楚辺・大木方面へ移動開始
- 5月1日 第三次移動開始(6月24日完了。漢那・中川・城原方面から)
- 6月7日 村民が帰村に伴い慰霊祭を行う(読谷初等学校校庭)
- 8月14日 第四次移動開始(胡座方面から)
- 10月16日 瀬名波・渡慶次・儀間居住許可
- 11月9日 第五次移動開始(石川市から。村民の移動ほぼ完了。1万4千余の村民が再び郷里に定住)

### 1948 (昭和23) 年

- 4月15日 建設隊感謝状贈呈式並びに移動完了祝賀会  
(『読谷村誌』より抜粋)

## 2) 字への復帰状況

本村の行政区は、戦後の軍用地の強制接收に伴い、旧集落地への復帰が不可能となり、あるいは、他地域への集団転居を強要されるなど、戦前の行政地区の位置とは大きく異なっている行政区が数多い、しかし現実では軍

用地の返還に伴い、戦前の位置に戻っていく行政区がある。

しかし、村面積の約47%が、依然として米軍基地として接收されるなど、ふるさとに戻れない方々がいるのも現実である。

以下は、各字の復帰の状況を述べたものです。

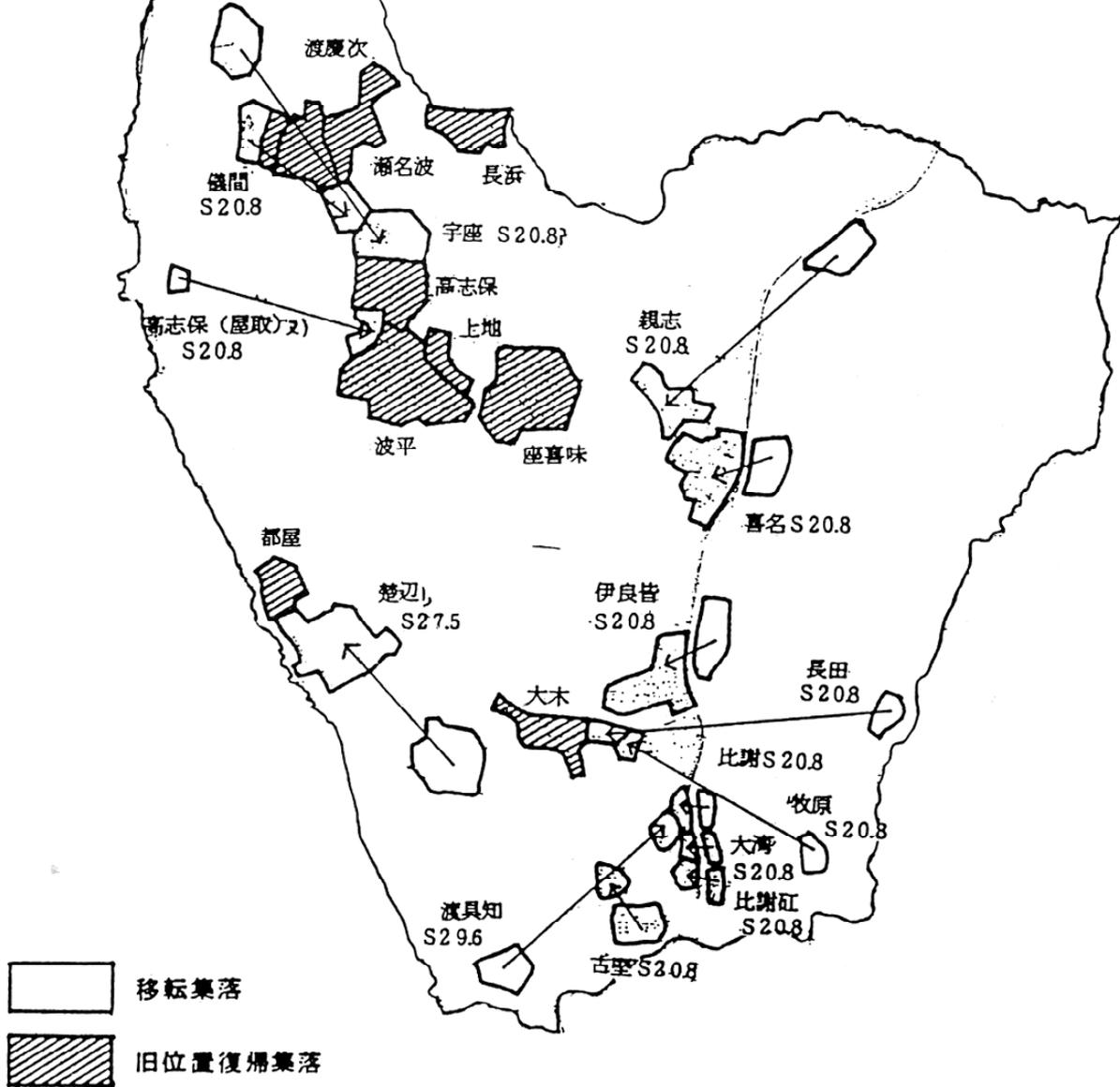
- 喜名 1948(昭和23)年12月に一号線(現国道58号線)以西に移動  
座喜味 1947(昭和22)年8月東側に移った後、1952(昭和26)年旧部落解放  
上地 1950(昭和25)年6月旧部落へ移動  
波平 1946(昭和21)年9月全面解放  
高志保 //  
都屋 1950(昭和25)年6月全面解放  
渡慶次 1947(昭和22)年移住許可になり移住したが、1948年5月に立ち退き命令が出され再び立ち退き、1954(昭和29)年4月に全面解放  
長浜 1951(昭和26)年全面開放  
楚辺 1947(昭和22)旧部落に移動したが、1952(昭和27)年5月再び米軍に接收され、現在地へ移住  
渡具知 1950(昭和25)年旧部落に移住したが、1954(昭和29)年6月に再び接收され、再び立ち退き(比謝西原へ)、1973(昭和48年)に全面解放後旧部落へ除々に戻る  
比謝 1951(昭和26)年旧部落へ復帰  
大湾 //
- 古堅 1954(昭和29)年6月旧部落の北側(現在地)に集団移動  
大木 1947(昭和22)年4月移住許可  
宇座 一部は長浜の地積である読谷バスターミナル付近一帯にややまとまって移住。  
1981(昭和51)年に部分解放後、旧部落へ除々に戻る
- 儀間 //  
比謝砦 大木地域に居住し、大湾・比謝の東側の解放方を関係当局に対し再三再四陳情を行ったが、軍施設の関係上解放できない旨の回答に接し、逐次旧比謝砦付近、大木周辺に敷地を購入、住居を建設し、次第に落ち着く
- 長田 //  
牧原 大木地域に居住していたが、1961(昭和36)年の初めに比謝伊保堂原と伊良皆西佐久原に敷地を共同購入し、1962(昭和37)年から新部落建設に着手し1965(昭和40)年までに移住を完了

(『読谷村誌』より抜粋)

# 字の移動の様子

1945年4月1日の米軍上陸後、読谷村には各種の軍事基地が構築されたため、旧来の村民の居住地域が大幅に変更されてしまいました。

この図は、主な集落の強制移動状況を示していますが、米軍基地の存在のため未だに旧集落地域に復帰できない人々が多数存在している。



\* 渡具知、宇座、儀間については復帰先地整備事業により、古堅については土地区画整理事業により集落復帰、住宅地基盤整備が進められた。喜名については移転地において、移転先地公共施設整備事業を導入し、住宅地の基盤整備を進めている。

資料：「読谷村市街地整備計画」(昭和59年)